

——千人にひとりの落ちこぼれ、未来の学校づくりを考える。

僕は教育を語るに落ちる人間です。

高校時代のテストの点数は赤点ばかり。つまらない授業のときは図書室に自主避難。授業への嫌悪感から、テスト用紙の裏面にびっしりと、いかに授業がつまらないかを先生に伝える。「嘆願状」と題する手紙を書き(表面のテストの点数は4点)、母は職員室にたびたび呼び出されて進級への危機的状況が伝えられました。奇跡的に入学した大学では落第点がずらりと並び、卒業するののに7年もかかりました。教師からは「千人にひとりの落ちこぼれ」と呼ばれました。

それでもなぜか教育、学校が持っている可能性に、常にワクワクしてしまう自分がいます。小学生のころから、話のおもしろい先生が大好きでした。高校生のころには、あまりにも話がおもしろすぎる米倉誠一郎先生に出会い、大学に進みたいと人生の舵を大きく切りました。魅力的な先生の話を聞くと、自分の心が火照るのを感じます。脳みそがグツグツと沸き立ち、未知の世界へ冒険したくてウズウズしてきます。僕にとって学校は、ときどきそんな先生とも出会える場所でもあったのです。彼らは僕にとって「希望を語る教師」でした。もしかしたら、つまらない授業に反抗し続けていたのも、学校や先生に対する、大きな期待の裏返しだったのかもしれない。

いま、学校現場が岐路に立っていると、方々で聞きます。本書にも登場する杉並区教育委員会教育長の

井出さんから「このままでは日本の学校は、2030年までに滅びるかもしれない」と聞いて、僕は衝撃を受けました。当時の僕は20代半ばで、パンングラアシュを拠点に教育を広めるNPO「eEducation」の経営から一歩退いた頃でした。NPO活動中は、アジア、中東、アフリカ、ヨーロッパと世界五大大陸の教育現場を、おもしろい先生たちとの出会いを求めて飛び回っていましたが、井出さんの言葉を聞いて「日本の教育現場について何も知らない自分」に違和感を覚え始めました。

「パンングラアシュの教育支援をしてくれるのはありがたいけど、自分の国の現場が気になるなら、君は一度帰国した方がいい」

現地の相棒にもそう勧められた僕は帰国して、自分の足で歩き、「日本の教育現場で何が起きているのか」について先達の話に耳を澄ませる旅に出ようと決意しました。

「日本の学校は、本当に、このままでは滅びてしまうくらい危機的状況なのか」
「これから日本では、どんな学校がよりよい未来をつくることができるのか」

そんな疑問を胸に帰国した僕は、ある友人の勧めで「みんなの学校」という映画を観ました。大阪にある公立の大手小学校に1年間密着したドキュメンタリー映画です。これが本当に目からうろこの連続でした。大手小学校で起きている児童と先生たちのドラマの数々にひやひやし、笑い、ドキドキし、クライマックスでは涙をこらえることができませんでした。そこには学校にかかわる誰もが「他人事ではなく、自分たちでつくる学校」があったのです。

「なんだ、日本にもうすぐ学校あるじゃんよ」

僕の心に湧いてきたのは率直な感動と、「大空小の校長の木村泰子さんに話を聞いてみたい」という思いでした。屈でも立ってもらえず、すぐに木村さんの登壇するイベントに参加し、「カバン持ちにしてください」と直談判をする——この本の旅は、そんな無鉄砲なシーンから始まりました。惜しくもカバン持ちは断られますが(笑)、木村さんの話をじっくりと聞かせてもらう機会を得て、僕の想像はふくらみました。もし日本各地に「みんなの学校」のような、未来の学校のあるべき姿が垣間見える教育現場があるとしたら、それをひとつずつ訪ねながら1冊の本に纏ったら、どんな物語になるのだろうか……僕の胸はワクワクで高鳴りました。

本書は、大阪の大空小学校を皮切りに、日本中のしびれる教育現場を歩き回ったルポルタージュです。東京の杉並区では、文科省の若手官僚たちが「日本でトップクラスの教育長」と敬愛する井出さんを訪ね、周回遅れのトップランナーを自称する地域ぐるみの学校づくりの取り組みについてうかがい、その思想に圧倒されました。テクノロジーの最先端を走るN高等学校では、「ちよっと色物かも」と思っていた自分を疑わせる骨太な学校づくりが行われていました。長野県上田市のサムライ学園に足を運んだのは、その卒業生が「日本一涙が止まらない」と友人から聞いたからです。そこには最後まで生徒たちの味方でい続けることを覚悟した教職員が、七転八倒ながらも前にめりに生きていました。岩手県大槌町では、「津波にさらわれて生き残った教育長」がゼロからふるさとを立て直すために学校づくりをしていました。数え切れない悲しい出来事が起きた後の荒地に、希望の学び舎を復活させる挑戦です。

5つの教育現場を4年半間かけて取材し、心にとまったエピソードを一つひとつ、丁寧に文章にしてみました。どの教育現場にも、厳しい現実に向直しているにもかかわらず、ユーモアと前向きな姿勢、そして希望がありました。どの話もドラマだけで、聞いているだけで鳥肌が立ちました。誰もが「とにかく勇気を持って生きよう」というメッセージを全身で発していました。僕がこの本を書く旅で出会った人たちはみな、間違いない「希望を語る教師」でした。

僕は教育を語るに落ちる人間です。

しかし、この旅で出会ってしまった、どうしようもなく魅力的な教育人たちの生きざまを次の世代に伝えるために、この本を書きました。彼らの姿、そして彼らのいる学校や地域の様子は、そう遠くない未来、いわば、2030年の学校教育のあるべきかたちを示唆しているのではないかと、少々えらいような物言いで恐縮ですが、僕は素直に感じています。

「とにかく勇気を持って生きよう」

彼らの希望の物語が長く語り継がれ、次世代の遺産になると信じています。